
回る視界と最後通牒

燈亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

回る視界と最後通牒

【Nコード】

N7181X

【作者名】

燈亜

【あらすじ】

拉致された。監禁された。縄でぐるぐるの状態。

だけど、自由がきかないからといって弱気になる俺ではない。

短編。

狭い部屋に奴の笑い声が響き渡った。心底楽しそうなその声は、四方の壁にぶつかって背筋を駆け上がるような不協和音になって戻ってくる。

……不愉快だ。心底、不愉快だ。

両手首を背中の後ろで無駄に太い縄で縛られ、なおかつ二の腕を胴体に隙間なく密着させる形で同じ縄で縛られている。もちろん動くことは全くできないし、痛い。これもまた、とてもとても不愉快だ。

壁にもたれて胡坐をかいている俺の前、一見すると無邪気な笑みを顔全体に溢れさせて見下ろしてくる奴。その吊り上がった口からはまだ笑い声がこぼれている。

……これこそ、史上最高の不愉快だ。

縄でぐるぐる巻きの俺を、奴のきらきらした視線が何度も往復する。脱出を試みようとしたせいで擦りむけた足だとか、縄の食い込んだ二の腕だとか。奴の目はそういう箇所で、まるでうまそうだとも言うように細まった。視姦されている気分とはこのことだ。腰の方から背筋を走った寒気が、体中に鳥肌を立てた。が、ただか鳥肌に負けるつもりはない。俺が現在相手にしなければいけないのは鳥肌ではないのだ。

俺は奴を、感じている不愉快さを表に出して睨んでやった。下から上へと上がってきた奴の視線と、まっすぐ見上げる俺の視線とがぶつかる。その瞬間、奴は蕩けきった表情を浮かべた。緩んだ口から、ほう、と熱い息が漏れる。

「ああ、もーほんと……」

赤ん坊を見つめるような瞳。

気持ちが悪い。なんでそんな目で俺を見るんだ、こいつは。理解できない。本当に、理解できない。」

「拉致監禁つてのを一番初めにやった人はすごいねえ」

俺の視線を無視して、奴の視線がまた、ゆっくりと上から下まで滑る。

「冷たい無機質な部屋、太い縄に奪われた自由、抵抗のまなざし」

芝居がかった口調で指を折りながら次々と奴は上げていき、そして最後に俺の頬に指を這わせた。その指は冷たかったが、俺は何の反応も示さなかった。ただじつと、奴を睨む。そんな俺に、首を傾げて奴は笑って見せた。

「何を取ってもキレイだ。ほんと、ぞくぞくする」

「……同性の野郎拉致つて綺麗も何もないだろ」

腰を屈めたせいで近くにある奴の顔に向かって、俺は淡々と吐き捨てた。すると、奴の唇の端が糸に引つ張られるようについ、と上がる。奴の人差し指、ぴんと真つすぐに立てられた人差し指が、俺の唇の真ん中に当てられた。

また、冷たい感触。

うるんげな俺の視線を受け止めて、奴はにっこり笑った。

「駄目だよお。拉致監禁の被害者は、加害者の許しがないやしゃべっちゃいけないの」

「んなの知るか」

「あーまたしゃべった。駄目だって言ってるのにー。……まあでもこれも、楽しみの一つ、かな？」

立ち上がった奴は、くすくすと笑いながら俺を見下ろした。

「ほんとーは。突っ込んでから、してもらうつもりだったけど。でも、縄でぐるぐるの状態でつても悪くは無い」

——その言葉が終わった瞬間。

奴の、革靴を履いた足が、避ける間もなく俺のわき腹にめり込んだ。鈍い音。

「いつ……」

コンクリートの床に、右半分の頬がぶつかると、奴の指よりももっとずっと冷たい。

かはつと、体の中にあつた空気が俺の口を通して吐き出された。連続して襲って来る痛み。耐える為に歯を食いしばる。

その時。

カシャツという、何とも気の抜けた音と一緒に、俺の閉じたまぶたの裏が一瞬だけ白く点滅した。

「なっ……」

床に倒れたままの体勢で目を開くと、こちらにむけられたデジタルカメラのレンズと目が合った。その下から見える奴の口が、にんまりと大きく曲線を描いている。

状況を理解するのにそんなに時間はかからない。

「お前っ……！！」

理解したのと同時に、再び音と共に白い光が俺の目をくらませた。続いて聞こえてきたのは、不愉快な奴の声。

「ああ、この顔だよこの顔。キレイだなー」

自分が撮った写真を見ながら、奴は恍惚とした表情を浮かべた。

「やっぱり想像と実物じゃあ、全然違うよねえ。俺、これだけで何回でもできちゃうかも。プリントして壁に貼って、その前でつても悪くないなあ」

絶句する俺に向かって、奴は笑った。

「部屋も縄も良いけれど、やっぱり一番の要因は君だよねえ。君あつての無機質な部屋、君あつての縄。君じゃなきゃダメ、君以外の誰でもダメ。君だからこんなにキレイなの。……ああ、君の持つてるものが増長されて、俺を興奮させてくれる。ほんと、最高」

虫唾が走る。気持ちが悪い。わずかに、体が震えた。

込み上げてくる吐き気は蹴られたわき腹のせい、奴の言葉のせいか。

歯を食いしばる俺を、奴は変わらない笑みで見下ろしている。拘束された手首が、二の腕が痛い。わき腹が痛い。片頬に当たるコンクリートの床が冷たい。奴の細められた目から覗く黒が、底が見えなくて気味が悪い。妖艶につり上がった唇もまた。

見上げる俺は何もできず、ただ奴を床に這いつくばったまま睨むしかない。……むかつく。

不意に奴は、膝を屈めた。俺と奴の顔が近づく。見たくもない奴の顔が近づく。

「ん……」

俺を眺めた奴は、考え込むように自分の顎に手を当てた。

「そーだなあ、ちよおつと色が足りないかもしれないねえ」

一体何の話だ。

見上げる俺の前、奴はくすぐるような笑い声を洩らした。

「大丈夫だよお、殺したりはしないから」

言いながら、奴はズボンのポケットから取り出したものをかざす。

「持つてきといて良かったなあ、これ。……ね、そう思うでしょ？」

知るかよ。

心の中で毒づく俺から答えは期待していなかったようで、奴は笑いながらカチカチという音と一緒にその刃を押し出した。

愛想の欠片もない蛍光灯の白い光を受けて小さく輝く刃。いわゆる、カッターナイフ。

「この部屋はモノクロ、君の学生服もモノクロ。これじゃあちよつと足りないの」

——大丈夫。俺が君をもっとキレイにしてあげるだけだから。

優しく耳元に囁かれた言葉。それと同時に近付いてくる銀色の刃が目の端に映る。

俺は奴から目を離さなかった。奴の鈍く光る目を凝視する。

また、頬に冷たい感触。奥歯を噛みしめる。当てられた刃は、結

構な力を持って斜めに走った。

「……っ」

思わず鼻に皺が寄った。さっきの痛みよりはまだましだと、自分に言い聞かせる。それでもやはり、痛い。

「おおー」

間延びした奴の声に怒りがこみ上げる。背中の後ろで拳を握り、高ぶった感情を込めて奴を睨む。目力、もしくは眼力というやつだ。

「いいねえ、黒と白と赤って。モノクロに赤っていうアクセントがあるだけで全然印象が違う。突き放すような印象から媚びてくる印象になったって所かなあ。……まあ、君自身はまだモノクロのままだけ」

そのギャップがいいんだよ、と付け加えて、奴は睨む俺と目を合わせて微笑んだ。

当たり前だ。俺が奴に媚びる時なんて来るはずがない。冗談じゃない。

俺の気持ちが分かったのか、奴はふっと小さく笑った。

「君が俺に絡みつくような視線を向けて、その口でもっとって言うようになるまで、あとの位だろうねえ」

「っざけんな、そうなたら俺じゃねえよっ」

勢いよく放ったつもりの声は、予想外に低くかすれていた。しまったと思ったがもう遅い。

予想外だったのは同じだったらしく、奴はぱちりぱちりと数度目

を瞬かせた。

嫌な予感。そういうのは当たるものだ。

見上げた先、奴の顔から始終浮かべられていた笑みが消えた。笑顔という存在そのものを顔というノートから消す早業だ。

俺は今まで無表情という表情なんて無いと、信じていた。見たことがなかったからだ。けれど目の当たりにした奴の無表情は、恐怖よりも何よりも違和感を覚えさせた。奴に対する罵詈雑言を無限大に準備していたはずの俺の口は動かない。

不意に、伸びてきた奴の腕が倒れたままの俺を引き起こした。血液がざあっと流れる感覚。視界が九十度動いて、奴の姿が眼球に映る。

「……」

何か言わなければと、舌を強制稼働させようとした時だった。俺の顔は、思い切り奴の肩にぶつけられた。鼻がぺちゃんこになる感覚と同時に、後頭部と背中 hands 手の感触を覚える。

俺の体は奴に押し付けられているわけだ。言い換えなんてしたくないがあえてしてみれば……抱き締められている。

酷い、凄まじい、とにかく強い、力だった。絞め殺されるくらいのだ。それに加えて、至近距離で、それもうずまき管に直に吹き込まれるように囁かれる声が脳内でわんわんと鳴り響く。

「あーあ、ほんとに君って計算乱してくれるよねえ」

アーアホントニキミツテケイサンミダシテクレルヨネエ。

無駄にエコーのかかった音の羅列に暗い視界が回る。

「でもねえ、君は分かってないんだよ。俺が何より望むのはあの世界から君を知る俺以外の全ての存在が消えること。流石に無理だっ

て分かつてるから実行しなかったけどねえ。……ああそれからね。
俺は俺がいらないあの世界に君がいるのが許せないの。でも君のいない密室に俺だけがいるのも許せない。だから君をここに連れてきたの。ここもあの世界の一部だけど、それでもここには俺と君しかないでしょ？俺と君しかないのに、君が君以外の何かに取って代わるわけがないよね？」

呪文かあるいはお経のような長々とした、けれど滑らかな言葉だった。頬の傷が奴の服に擦れて痛い。視界は依然として回っている。食道を、何かがせりあがってきた。

「俺と君しかいないんだから大丈夫だよ。どんなふうになったって君は君だし俺は俺。何も心配は無い。心配無用ってやつかな？」

ぐわんぐわんと脳みそが回転する。

ふざけんな迷惑千万唯我独尊野郎。宣戦布告だ。

返そうとした言葉は途切れた息になって奴の耳に届いたのかも分からなかった。

こみ上げてくる何かに息を吐き出して、ぐらぐらする視界に目を閉じたのが最後、だったのかもしれない。

——俺は貧血を起こした。らしい。

「なぜここで貧血？俺の話最後の方ちゃんと聞いてた？ねえ？」

「悪い、正直何も。それよりも血が足りねえ、レバーとほづれん草
食わせろ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7181x/>

回る視界と最後通牒

2011年11月11日12時36分発行